

「佐渡養順宛坪井信良書簡」抜粋（13点）現代語訳

①嘉永六年（一八五三）七月三日付書簡（番号「一〇」43ページ）

※以下、番号、ページ数は、宮地正人編『幕末維新風雲通信』による。

ポイント【ペリー来航一ヶ月後、江戸の混乱の様子を伝える】

（前略）

さて、先だっても申し上げましたが、近頃江戸は殊の外騒がしく、いつどんなことが起こるか予想もつきません。さらに、公方様（十二代家慶）は六月二十二日、実はご他界され、未だ発表はありませんが、ペリーの異国船騒動で江戸城内が大混乱しており、万が一、不測の事態が無いとも言えない様子で、城内の人々は心労が大きいとのことです。何やら底気味悪い世の中になりました。さて、家慶様にはお子様が無く、側室（妙音院）には昨年お誕生の長吉郎様がいましたが、これまた実は先頃ご他界されたとのことです。ついでに次期將軍の当面の候補も無くてはと言うことにて、或いは紀州様、或いは田安様がお乗り込みになるなどと色々噂が一方ならず、何れにも難しい世の中ですので、なかなか容易には議論も出来ない様子です。そのうちに、またまた異国船が渡来したので、今度はいよいよ江戸は大混乱に及ぶであろうと思います。ですので、（私のもとで学ばせていた）秀達（八代養順三男）・賢隆（同四男）は何分にも預かっておくには心配ですので、市久（市野屋久兵衛）に託して帰郷させたいのですが、異例の大暑ですので、とても道中も難儀だと思えます。よって盆後に早々出発させ、今月中か来月初め頃には帰郷させたいと思います。

（中略）

さて、先日の騒動を詳しく教えてほしいとのご伝言ですが、これはなかなかそうですか、という訳にはいかず、ただ江戸二百年来無かった大騒動というより言いようが無く、かの天草の乱でも関ヶ原の乱でも、同時にありとあらゆる大名・旗本皆が関与する騒動はなかったでしょう。今になっては色々話がありますが、先月二日より船が渡来し、十三日に去っていった、かれこれ十日余りの心配・混雑は普通ではありませんでした。勿論、武器商売、米屋等の他は皆々商売を休み、武家は一々門の出入りを厳しくし、一人も緊急の他は外出を禁止していたので、十二日、十三日頃は私も仕事で日本橋辺りを通行しましたが、荷物を背負う者も一人も無く、釣り船一艘も無く、武士には一人も会わず、町は両側共皆々商売を休んでいました。

（中略）

アメリカより三ヶ条の願いがありました。

一、交易 二、土地 三、縁結び（友好条約）

右の様に島ではない土地を拝借して交易場を開き、且つ兄弟の盟約を結び、その為、ご親族の内、男女に関わらず貰い受けたいと申しているとのことです。右のいずれも相談出来ないことで、右の願書は浦賀にて取り次いだので、当年中に返書を取り来るとのことです。八月か或いは来春に来るとのことです。さて、右の願いは一条も認可はできないとの命令があるうし、そうなるに唯々諾々と去っていくとは考えづらく、必ず戦争に及ぶであろうと皆は心痛しております。数百年、天下太平の惰眠を貪ってきた民衆は、戦争になればどうなってしまうのか、心配しています。

色々な面白い話が山のようにありますが、憚りがありますので、申し上げません。

要するに、（將軍の）運が衰え、徳が薄いと落涙しているばかりなのです。この頃は中国の宋時代中期のような乱世と言うべきでしょうか。

右はご一読されたら、燃やしてください。

（後略）

②嘉永六年（一八五三）七月十二日付書簡（番号「一一」47ページ）

ポイント【異国船騒ぎで第二人を帰郷させている】

（前略）

さて、秀達（信良次弟）は八月まで江戸留学の期限です。平常であればこちらから願ひ出て、一日も長く留め置きたいのですが、異国船騒ぎに付き江戸は殊の外騒々しく、いつどんなことがあるのか分からず心配でしょうから、先の配達便の市久（市野屋久兵衛）から申し上げさせましたお返事も待たずに、帰るように取り計らいました。何分にも僅かな日数でしたので勉強も上達させてやることもできず、また私も多忙で一日の暇も無く、これを記す遊学もできず、今さら残念の至りです。

（中略）

八月には異国船が又々渡来してくるといふ風聞がありま

すので、迎えに来るのを待たばどうかと心配です。ついでに賢隆（信良三弟）も一緒に帰省させました。何分にも人々の氣配が不穏な世間になりました。皆合戦の支度をのみです。

武器馬具屋、アメリカ様とそつと言つ

諸大名家では俄かに鉄砲を製造して調練して大混乱です。アメリカが来てても日本は筒がなし（恙なし）

すでに芝の辺り、鉄砲洲辺りの町家は避難命令が出ています。中々言葉には言い尽くすのは難しい混乱です。

（後略）

③嘉永七年（一八五四）四月十六日付書簡（番号「二五」74ページ）

ポイント【越前藩の奥医師に命じられる】

（前略）

私は今月十四日、思いもよらず越前藩の奥医師に命じられました。有り難いことです。即刻、殿様（十六代越前藩主松平春嶽）に拝謁を命じられ、翌十五日は奥様に初めて拝謁し、すぐさま診察を命じられ、諸事滞りなく終えました。このことをお知らせ致します。ご安心してください。且つ又、昨年来命じられていた種々の翻訳を差し上げました。お礼として中国製の堆黒筆立一つ、同じく中国製の堆黒文鎮二つ、大筆五本等を頂戴致しました。本当にありがたいことです。ただ今までは、新参でしたので、表医末席でしたが、突然奥医師に列したのは、（春嶽公の）ご指示によるとのことです。但し勤め向きは今まで通り至つて暇です。唯々ご容体が悪くなった時のみ診察を命じられるようです。誠に破格のごことで、勿体ないくらい有り難いことでございます。今月二十八日には、（福井へ）ご出発になるようです。お留守になれば、特に御用は無く、唯奥様お一人のみになるのですが、至つてお健やかでございます。

（後略）

④安政二年（一八五五）三月十日付書簡（番号「四八」115ページ）

ポイント【越前藩主・松平春嶽に拝領したガラス酒杯などを高岡へ贈つてくる】

（前略）

貴方様のお祝いとしてお菓子一品をお贈りいただき、誠にありがたく、お祝い申し上げます。家族一同、厚くお礼を申しております。ついでに硝子酒杯三組一箱、並びにコップ一個（魚子織の反物一反も添えて）贈呈いたします。これらは私よりの少しばかりのお祝いの印です。これにて二献を傾けて頂けたら本懐の至りでございますので、宜しく願い申し上げます。何分にも多年帰郷もしておらず、恐縮に存じます。母からの書簡はありがたく、これまたお礼を申し上げます。
ください。

（中略）

近頃下田（フランス船一艘渡来し、程なくアメリカ・ペリーよりロシアのブチャーチンへ書簡を送る飛脚船が渡来しました。しかし世間では聴き慣れたからか、とんと話もしません。

（後略）

⑤安政二年（一八五五）十月二十一日付書簡（番号「六三」143ページ）

ポイント【越前へ一年間の勤務命令が出て、困惑してくる】

（前略）

さて、前の手紙でも申し上げましたが、私は来年一年間、越前での勤務と内定したそうです。未だしっかりとはご命令はありませんが、重臣三人より内意を伺いました。今月二日にあった江戸の安政大地震の一件に付いても殊の外迷惑の至りでございますが、何分主君の命令ですので黙らざるを得ません。一つに（高岡への）帰省の内願を聞き届けられたのですが、先々はどのようなかは命令次第にする積りです。私は何事も無く生計をたてていてさえ年来の負債は今も返済し兼ねて困つていますが、一年も留守にしては、その内家族は生計の方法に困るであろうと思います。

（後略）

六」152ページ）

ポイント【アメリカ総領事ハリスが仲介した大統領ピアースの將軍家定宛親書↓公式翻訳と相違↓信良が独自に入手して翻訳したか?】

（米国大統領親書／安政四年十月来朝シテ呈スル書翰和解）

アメリカより差し上げた書簡和解

アメリカ合衆国大統領、フランクリン・ピアース

日本 将軍様にこの書簡を呈します。

大良友

合衆国と日本との間に、結んだ条約を修正して、将軍様の大國と合衆国とおびただしい諸産物の貿易をこれまでよりも大いにしやすいよう取り決めを致すべきと思ひます。従つて、私はこの件について貴国の外国奉行、或はその他、殿下の選任する役人と会議させるために、この書簡の使いとして我が國の高貴で威厳あるタウンゼント・ハリスを選びました。ただしこの者は合衆國の総領事として将軍様の外国奉行の信用を受けました。

私は合衆国より日本との親交を篤くして、かつ永続させ、兼て兩國の利益の為に通商の關係を強くする条約の趣旨について、奉行、或いはその他の役人が同意することは疑いはないと思ひます。將軍様は親切に高貴で威厳あるハリスを待遇して、私の為に將軍様に申し上げる旨を十分信用してもらうこと、私は疑いないと思ひます。

私は神の將軍様が安全に保護されることを神に祈念します。

私はこの事に合衆国印を添えます。ワシントンに於て自らサインしました。

千八百五十五年九月十二日

大統領フランクリン・ピアース

國務長官ウイリアム・マーシー

アメリカ使節謁見の際、発言趣旨和解

（中略）

総領事タウンゼント・ハリス

⑦元治元年（一八六四）八月三日付書簡（番号「一〇〇」217ページ）

ポイント【禁門の変の詳細を伝える】

（前略）

さて、近頃世情はとにかく不穩で、毎年毎月珍事が起こり、ただ道徳が衰え、乱れた世になっており、恐れる外はありません。七月十八日夜、京都において変事がありました。長州人が皇居の門（禁門）を攻撃し、兵火が起こり、市中の大部分が類焼し、二十一日に至つてようやく鎮火したということです。きつと高岡でも種々風評もあるでしょう。以前より色々入り込んでいるようでしたが、長州藩主父子が入京を禁じられ、その後福原越後という者が伏見まで来て、種々嘆願している内、益田右衛門ほか国司信濃等が後より来て合流し、いよいよ強訴に及び、事が成らないとみるや禁門を攻撃しました。もつともこれには貴族や大名の中には応援する者が少なからずおり、中国・四國の諸大名にも賛同している者が結構おり、事が発動しても、元々奇謀・策略が不一致で、福原も戦死（訳者注…実際は負傷）、益田は切腹（注…実際は敗走）、長州兵も多く死んで、国司は逃げ去り未だ行方が知れずです。このことに付いて殘党に罰が与えられ、長州藩に追討令が発せられ、西國の中国・四國合わせて二十二の大名家に命じられました。しかし未だ進発の日時、並びに手配等は評議中です。この内にお味方かどうかは分かるものと思ひます。貴族や大名の中で大きい家は十八家、皆長州に同情しており、既に火災中に頻りに（天皇へ長州へ）お移りを勧めておりました。また御所内へ長州兵を引き入れることなどは、鷹司殿・九条殿が始めた計略ということです。長州藩邸は京都・河原町にあり、また嵯峨天龍寺にあり、伏見藏屋敷には軍勢がいます。その他諸所に散乱する者が一時に頓挫し、手配に齟齬がありました。御所内の御花畑の側、並びに鷹司殿・九条殿邸内へ潜伏した者がまず動き出しました。その時、御所の堺町御門は我が越前藩の警固場でした。戦意は無く、死傷は少なかったです。攻防が色々あったところで、会津・彦根藩の加勢が来たので勝利を得ました。鷹司殿邸は浪士自ら砲火を放ち、九条邸は我が砲火で焼けました。長州藩伏見屋敷へは会津・彦根藩の軍勢が押寄せ、火を放つたといひます。また自ら火を放つたともいひます。鳥羽街道、竹田街道、嵯峨道などの諸方で戦争がありました。死傷者総計は未だ不明です。これに加え、京都市中の火勢は一段と拡がり、混在は察してください。二十一日に至つて始めて消火したということです。諸道の雑踏はひどかったといひます。

（中略）

前述した通り、この度の長州の一件、ただ事ではない一大事件ですので、この上のご処置はどのようなのか、何分西國・四國の二十一諸侯に追討令が出て、総大将（総督）は紀州藩主・徳川茂承（もちつぐ）様、副将（副総督）は我が

君（越前藩主・松平茂昭（もちあき））公が命じられました。状況によりご親征になるかもしれませんが、

（後略）

⑧元治元年（一八六四）十二月十八日付書簡（番号「一〇六」239ページ）

ポイント【幕府奥医師に任命され法眼に。感激しつつも勤務と出費の苦勞などを伝える】

元治元年十一月五日、医学に出精していること（將軍の）お耳に達しました。これにより、御ついでの際にご拝謁命令が下る通知がありました。

同十一月十五日、ご拝謁命令があり、丸薬一包を献上しました。

同十一月二十一日、新規採用となり、三十人扶持を与えられ、奥医師に命じられ、勤務する内に二百俵高に差額支給、外に御番料二百俵を与えられるとの通知がありました。

同二十二日、二十三日、二十四日の三日間は見習いとして、診察を命じられました。

同二十六日は見習い宿直でした。

十二月一日は初めての勤務当番でした。

十二月五日は天璋院様を初め、御方々様にご挨拶に伺い、同八日は清水新御殿の見習い当番勤務でした。

同九日は新御殿で初当番でした。

同十六日は法眼の位を与えられました。

（中略）

ああ、小生のような低い身分の者が、何という大幸であらうか。堂々とした幕府の家臣となり、莫大な給料を頂戴し、高位に叙され、十五、六人いる側近の医員に加えられ、有り難いことこの上なく言いようもない。唯々かえって恐ろしく勿体ないことです。殊更新参で江戸城内には諸事不案内で、どの様な不調法が無いかと心配していますので、夜勤明けで帰宅したら、いつも大いに疲れてグタリとしています。さてこれは公務の事です。それについて私の家の家計は物入りで、先般以来大よそ金三百両のほか、

金七両　お目見えの際、江戸城内下馬所の者への祝儀（以下十五項目計三百両の支払い）

一ヶ月以内にこのようでございます。先々これにて一旦落ち着き、来年よりは入費も減少するでしょうが、差当たりのところ、以前よりの負債が山のようにあり、衣服等も大いに従来とは違うので呉服屋への支払いも一ヶ月の内八十両ばかりに及びました。さてまた有り難いことに今年などは米価が高騰しているので、右の米払い代は金四百両になるでしょう。その他の頂戴物等も枚挙に暇なく、それ故来年中には今年度の入費は取り戻せるものと思えます。ご案じなさらなくてください。数年来の借金未返済分も二、三年内には必ず清算できるものと思えます。

また追々本郷御守殿（加賀藩十三代齋泰夫人・溶姫）へも度々拝診に出るということになっており、内々に私の身分来歴を詳細に申し出て、何とか養家（佐渡家）の僅かな名譽にもならないかと思ひ、やはり高岡に永久に居住し、地面も拝領し、毎年藩主様とお通りの際には拝謁し、年々帯刀を許され、町医師総取締とか、或いは町支配を脱すとか、何とか工夫したいと思っております。但しこれは現在の秘事です。このような事は少しずつししないと、却って失敗してしまうことが良くあります。結局これは私欲ではなく、唯生みの親への僅かな報恩にならないかとの思ひのみです。

（中略）

私も以後はやはり臨床は勤めず、休日にはかの『カンスタット』の出版（翻訳）を生涯の仕事にしたいと思っております。

（後略）

⑨慶応三年（一八六七）十月二十三日付書簡（番号「一三一」311ページ）

ポイント【大政奉還となり、今後戦争となっても心配は無用であると伝える】

（前略）

さて、本月十三日より京都にて一大珍事が湧き起りました。それは某侯（土佐前藩主・山内容堂）より盛んに王政復古の建白があり、遂に政權は朝廷へお返しになりました。官職共にご返上になりました。これは中々一朝一夕ことではありません。空が曇って暗く、幕臣の身としては残念至極、何とも言いようがありません。これについて人心が動揺し、日々議論が激しく、いつ何事が起こるやら、速やかに江戸へ帰ることになるやら、大坂に下ることになるやら、今度御所より諸侯に召集をかけるので、一同上京して、何らかの評議になるのか、中々凡人には及びもつかない大変革です。私はしよせん差し出している生命なので、今さら慌てはしません。唯有

事の時には（慶喜公に）お供する迄と決まっていますので、却って心安く思っています。万一戦争に及んでも、將軍の傍にいますので、容易位に弾丸に当たることはないので、心配しないでください。このような状況ですので、今晚にも事が起こるかもしれません。そうすれば、今後文通も疎遠になるかも分かります。

（後略）

⑩慶応三年（一八六七）十一月五日付書簡（番号「一三二」314ページ）（別紙）

ポイント【京都などで巻き起った「ええじゃないか」の詳細を伝える】

（前略）

慶応三卯年十一月朔夜記

十月二十二、三日頃より、（京都）市中の誰言うとなく、某町の某屋に某神某仏の御札が天から降ってきたという。そして連日いずれの町にも、誰の家にも降った。また御札のみならず小判二分金も降り、或いは某仏の木像・銅像も降ったという。右の様であり諸神仏の御札段々盛んに降り、一町ごとに三軒から五軒に降らない所はない。或いは一家で二枚三枚を拾ったところがある。京都の市内市外、東西南北残らず降りました。

（中略）

そして多人数で群れをなし、或いは紅白縮緬の揃いの半纏を着て、或いは銘々が思い付く装いで、娘は少年となり、老婆は娘となり、男子は女の服を着て、踊り回り、誰の家でも右の御札を飾り置いている所に舞い込み、騒ぎ回り、市中を狂い行く一群一群が連続し、その盛んなこと、祇園祭などの比ではない。貧富大小の差別もなく悉く商売も休み、家を空けて諸方へ騒ぎ回り、終日徹夜で少しも止むことがなく、歌声が湧くように、太鼓拍子木の音は雷のようである。町方取締役人などが制しても一向に耳に入らず、却って大人数で取り囲み、踊りを勧めるので、これもやむを得ず、手踊りなどをしてその場を逃れ去るなど、奇妙なことです。市中の者残らず狂気のように、七、八日まるで夢中で日を送るという。

（中略）

その御札は何というのではなく八百万の神、遠近の諸国諸仏の札である。誠に怪しいことである。更に怪しいのは、元々計算高い京都人が商売を止めて連日家を挙げての酔狂している理由が分からない。またその歌は、「カミハレ、カミハレ、ヤブレタラ、マタハレ、ヨイジャナイカ、ヨイジャナイカ、ヨイジャナイカ」

（中略）

伏見・奈良なども同様との事、大阪はどうか聞いていません。東海道筋、大井川の西の宿場に御札が降ったというのは、七、八月頃で、段々西方に及んだというのは訝しい。

十一月三日に聞いた話にて、准后御所へも御札が降り、御所でもこれを祭っていることが盛んだそうです。

（後略）

⑪慶応四年（一八六八）一月十七日付書簡（番号「一三五」322ページ）

ポイント【鳥羽伏見の戦い後、慶喜に従い軍艦で江戸へ。幕府の凋落を嘆いている】

（前略）

さて、先月二十五日、大坂よりお手紙差し出しました通り、十二月十二日より大坂に下っておりましたところ、時勢は日を追うごとに危険になり、正月三日より伏見において戦争が始まり、連日、幕府軍（東官軍）大敗。大坂城も危なくなり、伏見市中、淀・市川・枚方等、残らず薩摩兵に放火され、幕府軍（官軍）の死傷者は数が知れません。仕方なく上臈（慶喜）は正月七日晚、ご乗船にて、お忍びのようにして、私等お供して、当十二日に無事江戸に着きました。このような次第ですので、唯々素っ裸にて単身お供しただけの事です。荷物等は一式残らず京都・大坂にて焼失したやら、紛失したやら、未だ一向にわかりません。江戸へ帰って来たとはいへ、素っ裸ですので本当に苦しみ疲れ果てました。物議が紛々おこっていますが、何日かは何事も無く過ぎました。昨今の形勢では、いよいよ京都の方は勢いが盛んなのは薩摩・長州・芸州（広島藩浅野家）は勿論、尾州（尾張徳川家・紀州（紀伊徳川家）・越前等は皆京都方。熊本（細川家）・鍋島（佐賀藩）・加州（加賀藩）等は中立、大よそ七、八分は京都方で、江戸方は二、三分ばかりです。何分にも始めの程は薩摩人が大いに乱暴していたので、諸藩は呆れ果て、決心しかねている内に、長州人が上京して以来、諸々の願いは全て正大に取り扱われているので、これが却って幕府の大損害になりました。既に仁和寺宮（小松宮彰仁親王）様が征討大將軍に任命され、近日江戸へ進軍されるとの事です。幕府軍（東人）

は器械は多くかつ精密であり、人材も多く、兵糧・金銀も多く、兵士は皆、死を恐れず奮戦している。従って戦いは敗れるのは、実に怪しむべきである。その原因は何か。ある人曰く、命令が一つではなく、賞罰が不正で、意見を言っても行われず、実行するところは機を逸しているからなどが理由であるとのことです。この悪習は一大変革しない内は、江戸城も不安定で、有志の人は臥薪嘗胆、切齒扼腕して、各々その職務に尽力し、死あるのみ、と覚悟している。その他は知りません。私は戦地に臨む仕事ではないので安心とはいえないの、日夜不平不快の事を見聞きし、懊惱・憤懣に堪えません。慰みにただ酒を呑み、放言するのみです。金銀は融通しておらず、物価は上がり、強い者が勝ち、弱い者が他に制せられます。いつ日光とか甲州とかへお供しなくてはいけないのか分かりません。その最大の悩みは、人心離反です。この時に当たって君主たる者英断・果断をしてほしいものです。ああ、古今万国無比の滅亡の仕方です。さてさて遺憾とも、残念とも言いようがありません。加州侯も京都より召集を命じられたということです。英国公使パークスは大いに薩摩人を助けました。

十二月二十三日、江戸城二の丸が焼失。当時は西の丸だけで急に慶喜公が帰還されたので、殊の外大混乱でした。同二十五日、江戸の薩摩藩邸を焼打ち、船一艘を破壊しました。正月六日、幕府軍（官軍）大坂にて薩摩の船一艘を撃沈し、もう一艘はそれを知り逃げられないと思ひ自ら火を放ち、乗組員もどこかへ逃走しました。

（後略）

⑫明治二年（一八六九）五月十日付書簡（番号「一三八」330ページ）

ポイント【駿府（静岡）へ移り静岡病院頭並として医療とその教育に多忙な日々を送る】

（前略）

昨年冬以来、御地にて高岡学館を建設され、講師に命じられたとのこと、喜ばしいことです。ですが、きつと医業のお差し支えにもなるのでしようが、道の為、ご尽力していただきたいと存じます。

（中略）

昨年四月、慶喜公のお供で水戸で勤務していました。八月に半月ばかり江戸へ帰り、妻と倅（正五郎）を連れて駿府（静岡市）へ引つ越しました。十二月、（静岡）病院頭並を拝命し、駿府四ツ足御門外の病院構内に居住しています。

（中略）

この際八万の旗本は、出処進退を銘々の意思で、農民や商人になる者がいたり、官に仕える者もいます。千差万別ですが、皆等しく困窮しています。お供の同僚も少なくなり、埒もないことです。

但し、道の為、世の為、傍観しているわけにもいかないで、昨冬以来大いに病院建築の件を建白して、漸く出来ました。林研海（洞海の倅でオランダに留学六年した、学術拔群で現在日本の大医といふべき人です）が病院頭、信良・戸塚文海兩人（が頭並で）御役金三百五十両、御手当金百五十両、御扶持六人口米を賜りました。現在のこの時局のなか、ありがたい待遇です。身分も大いに昇進し、誠に以てありがたいことです。多分これで家計が成り立っていくと思ひます。但し、この病院の件について、皆で申し合わせ、自家の調査所は廃止し、毎日病院の仕事のみに従事し、病人の診察、病家の見舞い、寄宿寮書生への教育など、殊の外多用に暮らしています。

（後略）

⑬明治六年（一八七三）六月二十八日付書簡（番号「一四七」367ページ）

ポイント【静岡病院閉鎖され、明治以来初めて東京へ。洋式化され賑わう様子を伝える】

（前略）

高岡は藩札引替の件について混乱しているとのこと、ご尤もに存じます。他の県も同様のことです。

東京は日を追って繁盛し、驚くばかりです。鉄橋、煉瓦、各家が三階・五階とあり、随所が賑わい騒がしく、諸寺社の開帳や博覧会等の見物人は山の様です。剣術大会が大流行しており、その様は相撲と同様です。小学校が各町に出来、四民は混ざって一つになり、馬車・人力車の行き来は激しく止むことがありません。実に目覚ましいことです。

（後略）

[[] 文責　高岡市立博物館主査学芸員・仁ヶ竹亮介